

下程勇吉著 『廣池千九郎の人間学的研究』 を読んで

—自己変革・聖人・神—

小田川 方子

今春、モラロジー研究所研究部（現・道徳科学研究センター）で晩年の二十数年間廣池千九郎博士の研究と指導をされた下程勇吉先生の著書が、モラロジー研究所から親しみやすい形で出版されたことは、たいへん喜ばしいことです。この著書は、これまで下程先生が書かれた多くの論文の中から、今日的にとくに重要と思われるものを、大澤俊夫先生の監修のもとでまとめられたものですが、まさに、深い混迷の真只中にある私どもに激しい情熱をもって語りかけていられるように思われます。

下程先生のお名前をはじめて耳にしたのは、一九七二年の秋に研究部に来訪され、公演をされたドイツの教育哲学界の重鎮ホルノー博士のお話の中でした。博士は下程先生について、日本を代表する教育人間学の大家として、大きな敬愛をもって語られました。その後私自身、個人的に何回か先生から直接お話を伺ったことがあります。先生は、すでに三十代で西洋哲学、とくにフッサールの研究者として有名でいらしたようで、それから教育人間学という新しい分野を開拓されましたが、西洋哲学の一般的傾向として、身体性の軽視を強く指摘されたのが印象深く、貴重な思い出となっています。

下程先生の研究の特徴は、したがって、単に知的なものではなく、身体性をも含めた、全人的なもの、全人格的なものです。それが端的に現れているのが、先生がはじめて廣池博士の思想に触れられた一九七三年の大澤先生主催の研究部の発表会のあと、ある研究員が言及した『廣池博士日記』に非常な関心を示され、それがきっかけとなって、翌年研究部顧問に就任されたという事実です。下程先生は今回出版された著書のなかで、博士の日記のみならず、全百四十八冊にもなる未刊の『廣池千九郎博士資料集』に、主著『道徳科学の論文』と並んでまさに全身全霊をもって向き合われています。

以下で、本書の主要部分である第一部、「廣池千九郎の人間学的研究」を、下程先生のご意図に添えることを念じつつ、少し辿ってみたいと思います。

第一部は、二つの章から成っており、第一章は、「普通道徳の開拓者 廣池千九郎」という題名が付けられています。その第一節では、廣池博士の劇的な生涯が述べられています。大分県で浄土真宗の信仰に篤いご両親のもとに生まれられ、小学校時代から刻苦勉勵され、病苦や人間関係の悩みなどの試練を乗り越えて、小学校教師として活躍しつつ、社会的奉仕活動に情熱を傾けられたこと、その間に、同時に学問的探究の熱意を結実され、二十五歳にして最初の学問的著述『中津歴史』を出版されたこと、その後法律学研究を志すに至り、『東洋法制史』その他の著書を出版され、ついに在野孤立の独学者としては稀有のことでした。法学博士の学位が授けられたことなどです。

下程先生が目玉されるのは、とくに廣池博士の後半の生涯です。博士は学位を得られた二か月後の大正二年に、勤務先の神宮皇學館を辞し、天理教の教育顧問、および天理中学校長の職につかれます。博士は、天理教の草の根の民衆信者の「低い柔らかな広い心」に深く共感されたのです。しかし、博士は二年後に教団公職からの追放という大きな試練に曝されますが、それを恩寵として受け止められ、新たな道を切り開かれることとなります。

博士はすでに大正三年の『日記』に、ご自分について「最高道徳の開祖」と記していられますが、天理教を去られた翌年の大正五年には、「すなわち、慈悲寛大自己反省、絶対服従、無我の努力」という最高道徳の實質が示されています。そして、最高道徳を中心とした内容とする「モラロジー」を、博士の後半生の大著『道徳科学の論文』として——「神からの借り物」である身体ではあるが、非常にお辛かった持病を国内の各地の温泉という「神の体」の大自然の贈り物で癒しつつ——、大正十五年にほぼ完成されたのでした。その後十二年間は、モラロジーの講演や企業家の指導など、自我を滅して、もっぱら「天人合一的実践」によって人心開発救済活動に当たられたのでした。

こうした第一章第一節に続いて、第二節から第六節までは廣池博士の精神について、中国古代の思想や日本の伝統、さらに西洋の哲学者などと関係づけながら多角的に述べられるのですが、ここでは核心ともいえるべき言葉に絞って、下程先生の解釈に迫ってみたいと思います。それは、「心の立て替え」という表現です。これは、普通道徳から最高道徳という新たな地平の開拓においてもっとも重要な事柄と考えられます。

では、「普通道徳」とは、どのようなものでしょうか。私どもは、この語のもとに、一般的に社会で通用している、行為の規範を理解するでしょう。しかし、下程先生は、より深く洞察され、普通道徳のなかに潜

んでいる「利己心」を問題にされます。「人は、とかく利己心といえば、享楽・放縦・怠惰などの行状を連想し、道徳心といえば、その反対の克己・忍耐・熱心の行為を連想するのである。」だが実は「利己心を否定している普通道徳的自我そのものにも、利己心という白蟻は深く食い入っている……。まさにあらわな利己心中心の自我のみならず、利己心否定の自我もまたアンダーマイン（根こそぎ掘り起こ）されて、その神経が入れかえられなければならないのである」（三六頁）。克己・忍耐・熱心は一般的に推奨される徳でしょうが、しかしそこには「自分のために」という要素が含まれているのは、誰も否定できないでしょう。それを先生は厳しく（表面体には）利己心を否定している「自我」を有している、とされるのです。そしてこうした「白蟻」を「アンダーマイン」することが、「心の立て替え」にはかなりません。

利己心の自我を没却し、「自我の利己的本能の底の底まで掘り起こし、神経を入れ換えつくし、我は無我となり、意必固我の煩惱の水が溶けて、寛宏溫柔の菩提の水となる時、人は実に生まれたままの天真爛漫の赤子の心に脱体現成するのである」（四六頁）。赤子の心に帰るこの「心の立て替え」は、慈悲心を体現する「蘇生」であり、廣池博士の『論文』で「最高道徳の實質の核心」をなすといわれます。それは、「仏我一体・天人合一・神人一如の全靈的地平」であり、「低い柔らかな広い心」に帰一するところに、「神意同化」の最高道徳的地平が開けるのです（四七頁）。

続く第二章は「最高道徳の核としての神・聖人」という題名を有し、十六節が収められています。その冒頭で、下程先生は、廣池博士が亡くなられる二年前に説かれた、「結局、真の教育は、聖人正統の一乘法に依らねばならぬ」というお言葉を挙げていられます。そしてこれを、博士の「生涯あげての全人格的求道の

結語ともいうべきもの」と記しておられます。つまり、下程先生は、博士の最高道徳の到達点を、真の教育、また博士の一生の全人格的求道の結論とみなされるのですが、それは、「聖人正統」の「一乘法」（人びとを救うための唯一の乗り物としての教え）を拠り所とするものであると理解されるのです。

では、聖人の教えとはどのようなものでしょうか。世界の諸聖人に共通する特徴を、下程先生は次のように記しておられます。「聖賢は、襲い来る人生の暗黒をまともに受けとめる寂寞孤独の限界状況において、その暗黒そのものに反照して、あらわとなる永遠の光のもとに、回心し蘇生して、永遠の現在に住する神の慈悲心の地平に導かれたのであった」（九八頁）。すなわち、諸聖人は、「人生の暗黒」の限界を身をもって体験し、そこからよみがえって、永遠の光の地平に参入したとされます。

これに対応するかのようには、廣池博士は、身体面において、終始言語を絶するほど「苦しみの人」でした。しかし、すでに大正元年の大患に際して、「この病あればこそ、我が心を改めて、今後純然たる世の為のはたらきをする決心を固むることを得るなれ」と日記に書いておられます。さらに心身両面での苦しみの試練は、大正四年の教団公職追放の際、極限に達し、「あたかもキリストが十字架に磔けられたときと同じ有様」でした。そして、キリストが十字架そのものにおいて神の愛の永遠の光を証したように、博士は、人生の暗黒の限界状況において、神の永遠の光を仰ぎ、「自我没却神意同化・慈悲寛大自己反省」に徹して、キリストが「心やさしき者は神を見る」と語ったことと軌を一にして、「低きやさしい広い心」というすべてを包み生かす地平を開かれたのです。

聖人の教えに因しては、さらに、博士のご逝去半年前に刊行された『道徳科学及び最高道徳の實質並びに内容の概略』で、「聖人正統の教えは、人間の享楽一切を奪うごときことを為さず、すなわち敢えて難きを

人間に求むるものにあらず。……利己的本能を去つて天地の全法則に従えといふのである」と言われています。ここで「天地の全法則に従え」とされるのが、「神意同化」にほかなりません。下程先生はそれを天人一貫の「至宝」と呼んでいられます。

さて、ここからの下程先生のご研究の成果は、私には、廣池博士の最晩年の思想の有する宗教性を鮮明にされた点で、とくに独自性のあるものではないかと思われれます。先生は博士の次のようなお言葉を引かれます。「自我没却の原理も、人間が万有共存の理にもとづき、神に近づく原理であり、かつ人間が神とともに真に永久に生きていることのできる原理であるのです」〔概略〕。そして、これとの関係で、「自我没却の原理」と並ぶものとして、「神の原理」という概念を立てられるのです。そして、「自我没却の原理」と「神の原理」とは、密接不可分の関係を有しているとされます。では、「神の原理」とはどのようなものでしょうか。

下程先生は、これら二つの原理を並べて論じた第九節において、「神・仏・天の光なくして、自我の利己的本能は没却せられぬのである。そこから……超越的な神・仏・天の場との関係が支配的な重みをもって語られるのである」(二七頁)といわれます。先生にとっては、神とは、「超越的な神・仏・天」と同義であり、光を有する高次元の場であるのです。この神の原理に基づいてはじめて、自我没却の原理も働きうるのです。さらに「神の原理」は、他のすべての原理の母胎であり、一切の原理がそこに帰一するとともに、また一切の原理がそこから出てくる中心として、「原理の原理」であるとされます。

しかし、原理ないし原理の原理という表現に対して、それは単に理論的に考え出された仮説にすぎないのではないか、という疑念を抱く人びとも少なくないかもしれません。そこで下程先生は、博士の『論文』の次のようなお言葉を挙げられます。「最高道徳は、宇宙根本唯一の神の心を体得実現せる世界諸聖人の実行せるところの道徳に一貫せる最高原理であります。故に、その当然の結果として、神の存在を認むるのであります。」そして、「宇宙根本唯一の神」は、「本体」とも名付けられる超越的絶対的實在であるとして、それは「この宇宙の間に生きていること、……すなわち人格的に働いてこの宇宙を支配しておるといのであります」(二〇頁)。換言すれば、世界の諸聖人を通じて、宇宙の本体としての神がおのずから認められるとするのです。

ここで下程先生が注目されるのは、博士が宇宙の本体としての神を、同時に、「人格的に」見ていられたということ。すなわち、知・情・意を備えた私どもの全人格の対象としての神は、これを人格的なものと見なければその真相が把握されない、という博士のお言葉を引き、宇宙根本唯一の神は、諸聖人の全人格的活動の根源として、「全面的に人格的である」(二七頁) 結論づけられるのです。

これとの関連で私が心を打たれるのは、浄土真宗の家に生まれられた廣池博士と、徹底した真宗信者のご母堂をもたれた下程先生が、ともに最晩年に深く共鳴されたのが、浄土経典の一つ『大無量寿経』に説かれている阿弥陀如来の成立過程であったという事実です。博士は、昭和九年の講演で次のように言われています。「宗教上、神仏もしくは聖人といえども、修行と苦勞とによって、成長発達しここに到つたのである。無量寿経に阿弥陀如来の由緒があるが、初めは當者、次に出家して法蔵比丘↓法蔵菩薩↓無量寿如来となるのである」(遺稿)。「神も聖人も阿弥陀如来も、修練によってここに到る」(遺稿)。昭和八年の遺稿では、傍

点を博士ご自身が付けられた次のような大胆な言葉があります。「神も進化して神となる。」これを下程先生は、「最高道徳的精進至上主義による人格神中心の見地」と特徴付けていられます。

第二章の最後の第十六節では、「最高道徳的（心使い）の幾山河」という表題のもとに、博士の大成期を中心とした日記や遺稿が丹念に辿られます。下程先生は、「モラロジー人間学」という表現を用いて、それが人間の「利己的本能」、すなわち人間存在の隅から隅までしみついている自己中心主義に鋭い洞察の眼をそそいでいるとされます。この利己心の暗闇に閉ざされて、人は現実生活の「苦しさと空しさ」の重圧にあえぐ虚無主義者となり、ただ「高き固き狭き心」の場にあるのですが、それと対照的に、幾重もの暗雲を排除し、よく神の慈悲と知恵の光を仰ぐ「心の立て替え」を成就すれば、神の光のもとに、心自ずと澄み、八面玲瓏となり、「低き柔らかな広い心」の場が、自己も他者も「よろこび」をもって充たすとされます。それゆえ人は、「全身全霊あげて、（心使い）という全人格的实践に取組」まなければならぬと言われます。そして、博士の「心使い」の幾山河を逐一点検されたあと、それを、我が身中心の小宇宙より神中心の大宇宙へ、自我より無我へ、人心より道心へ、利己心より慈悲心へ、利己の本能より道徳的本能への解放・転換・飛躍としての「心の立て替え」「回心」「解脱」「更正」「みそぎ」「洗礼」に道をつける実践的工夫そのものにほかならないとされます。こうした「心使い」という全人格的生活態度が、神意に同化した新しい人格を生み出すのです。

以上で下程先生のご著書の主要部分である第一部を概観したのですが、先生のご研究の特徴はどこにあるのでしょうか。それはまさに、「人間学的」であるということではないかと思われれます。すなわちそれは、廣池博士と博士の思想を、単に知的・分析的ではなく、できるだけ生き生きとした形で、統一的に、全人格的に説明しようとしています。

博士の思想は、博士ご自身のいのちを賭けた苦闘のなかから生み出されたものですが、下程先生ご自身のご研究態度も、みずから博士の生き、かつ目指された地平に参入して、博士の人間性の核心に迫ろうとしていられます。このご著書はまさに下程先生の「入魂の書」とお呼びすることができると思われます。それだからこそ、現代では通常ははっきりと区別され、分離されている対概念——自己と他人、道徳と宗教、人間と神、地上的なものと超越的世界など——が、歴史上の偉大な人格者である諸聖人によって媒介されつつ、全人格的ないのちの流れのなかで、ダイナミックに流動化し、渾然一体となって、自己の根本的変革と神意に同化した新たな人格の実現に到ることが、説得力のある形で示されたのです。

ここで述べられる真の人間のあり方、真の自己への道は、混沌とした現代に生きる私どもにとって、知恵と慈悲に充ちた確固とした指針となるのではないのでしょうか。